
最期の恋文

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期の恋文

【Nコード】

N7535X

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

昔々、《君といたあの日》に結ばれ、《ささやかな悪意》で壊れた夢が、時を越えて《残酷な奇跡》となり実を結んだお話（多分）流行（？）の兄妹モノを書こうとしたら、設定が膨らみ擦れて混沌色に染まり果ててごらんの有様です。

どうしてこうなった。

（某所の夏企画用）

『 はじまり 』

長い黒髪を指ですきながら、少女は笑う。

肖像画に描かれた、美しい歌姫の在りし日の姿に、彼女はよく似ている。

くすくす、と笑い続ける彼女を、屋敷の使用人は気味悪がった。

ただでさえ言動が狂気じみているというのに、その容姿は致命的なレベルで最悪だった。屋敷の関係者なら誰もが知る、あの歌姫を、抗おうにも克明に思い出させるからだ。

「早く、早く……きて、早く、きて」

彼女は心の底から欲していた。

この世でたった二人、アリエッタの因子を受け継いだ男女の片割れ。

ユディフォード・オーリエス。

いや、今はユディフォード・オーリエス・ジエストフェリ。彼女と同じ容姿を持ち、稀代の人形師にして、人間を辞めて魔族に至った存在。そして今は魔族の王の後継者だ。

種族を変えることなど、普通では決してありえない。

それを可能にしたのは他ならぬ、歌姫アリエッタの『因子』だった。少女にはない、亡き歌姫の因子を彼は持っている。だから彼女は、彼を呼んでいる。欲している。求めている。

「あなたは……わたくしと結ばれなければいけません」

アリエッタの血肉を受け継ぐ娘と、因子——力を受け継いだ青年。これは運命なのだ。

二人は必ず、必ず結ばれなければいけない。

そして、もう一度。

「この世界に《お母様》を産みましょう、《お兄様》……」

『うたひめ』

「実はね、アリエッタは私の恋人だったんだよ」

それは魔族という種の頂点に君臨する、人間に魔王と呼ばれる存在、クレディリット・マリ阿斯・ル・ジェストフェリの、突然にして衝撃的な告白だった。

「……は？」

向かい側にいた彼の義理の息子は、思わずその手からカップを落としかける。

別に恋人がいたとか、いるとか、そんなことはどうでもいい。同性ながら壮絶に魅力的である義父ならば、それこそ相手には事欠かないほど引く手数多なのは誰でも予想できるからだ。

問題は、恋人だったと言った、その相手の名だ。

「……正気ですか？」

「ああ、正気だよ」

クレディリットは、優雅に紅茶を飲む。

その顔に慈悲深くも底の知れない、意味深な微笑みを浮かべながら。

ユディ——ユディフォード・オーリエス・ジェストフェリは、正直、この義父がどうしても苦手で仕方がなかった。決して嫌いではない。だがどうにもやりにくい相手だった。

全てお見通しだ、と言いたそうに細められる赤い瞳。緩やかな癖のついた金髪。そして人間に換算すると中年の域に達しているにも関わらず、まるで衰えないその美貌。

絵に描いたような貴族、そして君主。

嫌だと思いながらも、なぜか彼の命令に逆らえるものはいなかった。

元人間で忌まわしい過去を持つユディを養子に、拳句に後継者にするといっても、苦言をもらすものこそあれど、表立って反対の意

思を示すものは今のところ出ていない。

いつそ出てきてくれたなら、ユディは喜んで義父に自体の意思を伝えられるのだが。今のままでは反対者がいないじゃないか、という一言と、有無を言わさぬ微笑の前にばっさりだ。

「それでね、ユディ。お前に一つ行ってほしいところがある」

「はあ……」

「アリエッタが生前暮らしていたという、トゥルーリア家の別邸だ」そこにね、とクレディリットは、少しだけ真面目な顔をする。

いつの間にか声は小さくなり、まるで密談のようだ。

「先日、トゥルーリア本家からどうしてもお前をそこに行かせてほしい——という手紙が届いたんだよ。そこに君に逢いたがっている、一人の令嬢がいらっしやるそうだ」

差し出された封筒。

そこには、トゥルーリア家の家紋が記されている。

「かの一族が跡形も無く屠ったはずの、歌姫アリエッタの『娘』を自称する少女。それがお前を呼んでいる令嬢の素性だ。どうやらあの屋敷に、彼女はずっと幽閉されていたそうだよ」

その言葉に、ユディは絶句する。

それはあつてはならない、あるはずがないことだったからだ。

公爵家トゥルーリア。言葉を統べるかの一族の別邸。そんな場所に暮らしていたアリエッタという名前を、ユディはある少女以外に思いつくことはできなかった。

——アリエッタ・ライム・エル・トゥルーリア。

それは、齢十四で全てを失った、言葉を統べる血統の《最高傑作》。

この世に今も呪いと紙一重の祝いをもたらす、悲劇の歌姫の名であつた。

美しく艶やかな黒髪、星のようにきらめく銀色の瞳。

闇に属する種でありながら、神に愛された娘と呼ばれたほど、彼女は美しかったという。

だが彼女はすでにこの世の人ではない。

ユデイが義父と出会う、それよりずっと昔に亡くなった存在だ。

「……亡くなられた時、十四だったと聞きますが」

「ユデイ、私の母は、私を十三で産んだよ。庶民はともかく、貴族の間では十四は十分に『大人の女』として機能すると見られ、嫁にも行くし、子供を生む義務も背負うものさ」

確かにユデイの知人には、かなり幼いうちに結婚してしまったものもいる。所詮、貴族間の婚姻など政略以外の何者でもなく、子孫繁栄を重要視するゆえに産めるなら産まされる。

しかしあのアリエツタだ。彼女の実子など、噂にも聞いたことがない。ましてや目の前の義父はさっき、彼女が恋人だったと宣言したのだ。それも、ユデイにとっては寝耳に水だ。

義父の幼馴染にして理解者である侍女のナリア曰く、若い頃のクレディリットはかなりやんちゃな性格だったらしい。良くも悪くも無邪気で、自分の思うままにふるまっていたと。

欲しい物があれば手に入れようとすぐさま動く彼が、もしも人を愛せば。

何が何でも手に入れようとするだろうし、あの美貌ならば入手など容易かっただろう。

「まさか……貴方の子、だと？」

「ふふ、安心したまえ。私の後継者はお前だよ。それに噂では娘だそうだし」

「別にそういう意味では……」

「ともかくトゥルリア家が、どうしてもお前をよこしてほしいとうるさいんだ。お前というよりも、あの二人が目当てなんだろうけどね。娘同士、何か影響があるかもしれない、とか」

死ぬほど面倒なことに巻き込んですまないね、とクレディリットは苦笑する。

だが、相手の魂胆はわかった。

アリエッタ絡みなら、ユディとあの二人がいくしかない。すぐに準備します、と言い残して彼は席を立った。その背中を、クレディリットは不気味なほど優しい目で見つめている。時折、ユディに向けられる奇妙な愛がこもった目だ。

もしかすると家族が欲しくてユディを養子にしたのかもしれない。だったら、さつさと結婚すればいいと思うのだが……若くして世を去ったアリエッタを、忘れられないのだろうか。

まあいい、とユディは自室に向かう足を速める。

義父のプライベートや過去に、さほどの興味はない。アリエッタとの関係は気にならないといえば嘘になるのだが、逆に自分と二人を手中に収めた動機らしきものは見えた気がする。

歌姫を忘れられず、それに関係するものを手元に置く。

義父の性格なら、実にありうる流れだった。

ユディはその日のうちに、トゥルーリア家の別邸へ出発した。

別邸にいとされるアリエッタの娘。それがクレディリットの子なのか否か、明確な答えをもらっていないと気づいたのは、別邸を目前にした馬車の中のことだった。

『まなざし』

トゥルーリア家の別邸は、人里からかなり離れた山奥にあった。周りに集落も山小屋さえなく、森の中を切り開いた道だけがまっすぐ伸びる。そこを馬車で数時間ほど進んだ先にあったそれは、もはや別邸というよりも隠れ家に近いように思えた。

馬車から降りたユディは、荷物を手に屋敷を見上げる。

見た目はごく普通の、ただの屋敷だ。

公爵家の本家所有の別邸にしてはやや地味ではあるが、それでも大きな都では中流貴族の屋敷程度の豪華さはあるだろう。こんな山奥ならば、多少装飾が地味でも致し方ないか。

その代わりなのか、屋敷の前面に広がる庭はかなり整えられていた。

長い道の先にあるこの庭は、いきなり視界に飛び込んでその色彩を伝えてくる。トゥルーリア家お抱えの庭師は、界限でも凄腕の職人と誉れ高い。きっと彼に整えさせたのだろう。

「お庭きれいですの」

「お花きれいですの」

ユディの傍らには、よく似た容姿の、色の違う二人の少女が立っていた。しかし今は各々に近くの花壇の前にしゃがみこんで、咲き誇る花をキラキラした瞳で眺めている。

それを眺めてから、ユディは馬車の中にある荷物を引っ張り出す。二人は荷物のことなどすっかり忘れてしまっているのか、きやあきやあとはしゃいでいた。

そういう姿は実に、ごくごく普通の少女と言える。

同じデザインの、色違いの衣服。長い髪は絹糸のように細く艶やかな金色で、それぞれ毛先にかけてわずかに違う色が滲んでいた。それは、それぞれの瞳の色と同じだ。

双子の片方は朝陽。

白い衣服に身を包んだ、朱い瞳の少女。

もう片方は夜宵。

黒い衣服に身を包んだ、藍い瞳の少女。

ユデイがそう名前を告げた、人形のごとく見目麗しき双子の姉妹。常にユデイのそばにいる彼女らは、ユデイの妹でもないし身内でもない。かといって義父の養子でもなければ実子でもない。あえて言うなら、ユデイの養女——というべきだろうか。

表向きは『使い魔』ということになっている。

まだユデイが人間だった頃、彼は二人を商人から『買った』。

奴隷として使役するためではなく、諦められなかったとある目的のために。

もつとも……二人と過ごす生活の中、ユデイは目的を捨てたのだ。

母を早くに亡くし、己の力だけで彼は生きてきた。

晩年の母に叩き込まれた、魔術の力。死期を悟った母は、ユデイが泣こうと喚こうと、容赦なく魔術を学ばせた。文字通り叩き込んできた。これがお前のためなんだと、泣きながら。

母をそうまでさせた理由はわからない。

名も顔も知らぬ、父に関係しているのかもしれない。実はユデイの父はそれなりの家柄の生まれで、魔術師として名をはせればユデイの存在に気がついて守ってくれるのではないか。

実の子だと知れば、助けてくれるのではないか。

そんなことを母は思ったのかもしれない。

母の思惑はさておき、ユデイは一人で生きていく術を手に入れた。持ち主のみを守る人形を作り続け、その筋では知らぬ者はいなくなり。貴族のみならず王族からも発注がくるようになって。いつしか彼は『稀代の人形師』と呼ばれるようになった。

ユデイは注文を受けるままに人形を作り、得た利益でさまざまな研究をする、というごく普通の日常を過ごした。傍目には若くして財を築いた、まさしく恵まれた存在だっただろう。

どこまでも高みに上れる天才だと、誰もが思っただろう。

——そんな彼でも、届かない限界はある。
種族だ。

どうやっても、人間では至れる高みが知れているのだ。数千年さえ生きられるといわれる魔族と人間では、あまりにも与えられた時間、体感する時の流れも異なっていた。

ならば、自分は誰にもマネをできない偉業をするしかない。

そして彼は今までとは別物の、誰もなし得なかった『人形』を作ることにした。

すなわち、生きた人形を。

魔族さえ生み出せていないそれを生み出したなら、ユディの名前は永遠に残る。それは永遠の生といって差し支えない。ただの『才能のある人間の人形師』で終わるつもりはなかった。

しかし——ユディはそれを捨てることにした。

人形の素材の一つとして、商人から買った名もない双子。二人との生活で、ユディは違う未来を見てしまった。穏やかに時間を流し、双子の成長を見守り、兄として親として生きる。

二人はいずれ嫁ぐだろうし、子供も生まれるだろう。

彼女らが得た新しい家族に見守られながら、手を握られながら静かに死ぬ。

それでいいじゃないかと、思ってしまったから。

しかし捨てたはずの目的は、その直後にこの上なく歪な形で達成された。夢を捨てたことを知った双子が、ユディのためにという想いから、実験を強行してしまったのだ。

人ではなくなった二人のため、ユディもまた同じ実験を身体に施す。

そして、本来はならばあるはずの無い力を手に入れ、魔族に変わったのだ。

その時に得た力がユディ——いや、朝陽と夜宵が招かれた理由だ。彼に常に寄り添っている『使い魔』たる双子の人形姫。

歌姫亡き今の世で、唯一その歌姫の詩を制御しうる『アリエッタの娘たち』。

彼女らの力が、協力が、どうしても欲しいのだろう。

そうなった背景には、三人が人間ではなくなった原因となった実験に、アリエッタの遺物が使われていたせいだと義父は言っている。実験の副作用、副産物、そういうものだ。

ユディはせいぜい、人間を辞める程度だった。魔族と成ったことで魔術師としての力が多少は増しただろうが、これという自覚が無いのでおそらくその程度の変動だろう。

双子の場合は、同性ゆえにユディよりも強く影響がでたらしい。アリエッタの詩を、双子は完璧に操ってみせる。まるでアリエッタ本人のように。

しかし二人に術式の才などない。元は完全なる人間だから仕方が無いが、本人たちにも引き出せない力は、それでも『存在する』がゆえたちが悪い。

眠っている方がずっとマシだ。起こさなければ封印もしやすい。そこで人形師でもあるユディが出てくる。

双子を『人形』に見立て、ユディが制御するのだ。言うならば指揮者だろうか。それには双子との間に硬い信頼関係が無ければいけないが、三人の場合、その心配は無用だった。

二人が謳い、ユディが支え、歌姫の詩を制御する。それが、今の三人の生き方だった。

奇しくも——かつてユディが描いた光景は、叶ってしまったわけだ。

今となつては、底意地の悪い皮肉でしかないが。

「ユディさま」

「誰かきましたの」

荷物を全部引っ張り出したところで、同時に服を引っ張られる。

「ユディフォードさまですね。そして……朝陽さまと夜宵さま」

現れたのは、いかにもといった衣服に身を包む侍女だった。年齢

は大体中年、という感じだろうか。ちょうど義父に直属で使える、ナリアという侍女と同じぐらいの背格好だ。

淑女という言葉が似合いそうだ。

おそらくはそれなりの、名のある家系の出なのだろう。

「中に入ってお待ちくださいませ」

「……わかった」

彼女に促されるまま、三人は屋敷の中に入る。

別邸という呼び名だが、かなりの広さを誇る敷地があった。

屋敷の大きさも、ユデイが所有する別邸よりも大きいのではないだろうか。まあ、ユデイの場合、別邸というよりも工房という感じなので、屋敷の大きさはさほど重要ではないのだが。

中に入ると、そこは吹き抜けの、広々とした玄関ホール。

天井からはシンプルだが大きなシャンデリア。いかにもといった感じの内装だ。いたるところにトゥルーリア家の紋章をモチーフにした飾りやらがあるのも、実に公爵家らしい。

だが、それよりも目が向かったのは、玄関からまっすぐ進んだ先にある広間。おそらくパーティの類では、ここが休憩室か何かなっているのだろうが、そこは明らかに異様だった。

「これは……」

黒い髪、銀色の瞳。

そして、うっすらと薔薇色に染まる唇。

壁という壁に飾られた、一人の少女の肖像。それこそ壁紙のように、彼女はびつしりと飾られていた。彼女を目に入れないですむのは、うつむいている間だけという感じた。

優しく微笑むその少女の名を、ユデイは知っている。

いや、誰もが知っている。

「アリエッタ・ライム・エル・トゥルーリア……」

それはこの別邸の持ち主たる公爵家が、かつて誇った《最高傑作》の歌姫。言葉を、その音を統べるがゆえに、歌声も重視したかの一族に生まれた、まさに神に愛された選ばれた少女。

その声はいかなる奇跡をも呼び、その詩片は永遠の守護を約束した。

だが彼女は――。

「これは歌姫さまですの？」

「アリエッタさまですの？」

「ああ、そうだ」

「そっくりですの……」

「おなじですの……」

二人は、たた、と肖像画の一枚に駆け寄っていく。

おそらく、一番最後に描かれたものなのだろう。

年齢に似合わぬ凜とした表情で、かすかな笑みを浮かべる一人の少女の一瞬が、そこにしっかりと描かれている。なぜ残されたのか、理由は定かではない。

「でも、すごく綺麗な人ですの」

「憧れちゃうですの」

ねー、と互いを見合って笑っている。

そういうところは、何もなかったあの穏やかな日々と同じままだ。あれからもう三桁ほどの年数が流れたが、それとも人間ではなくなったせいなのか、双子の精神年齢はあまり生長をしていない。肉体に関しては、言うまでもなかった。

ユディもまた、これという変化はない。

――ある部分を除いて。

昔のユディはこげ茶色の髪と瞳の、ごく普通の容姿をしていた。

だが、今は違う。双子に無かった変化が、ユディに起こっていたからだ。力ではなく別のところにアリエッタの影響が出ていた。だから二人が、ユディを見て『そっくり』という。

艶やかな白い床。

そこに反射するうつむいた己の顔。

長く伸ばされた黒髪。そして月のようだと義父に言われた、銀色の――。

「ユディフォードさまですね。お待ちしておりました」

そこに、初老の男性――おそらく屋敷の執事がやってくる。

数名の使用人も、その背後に控えていた。彼らは静かに、すばやく動き、ユディたちの荷物をさつと受け取った。そしてあらかじめ決められているらしい、二階の客間に向かう。

「お部屋の準備が整うまで、こちらでお待ちくださいませ」

「……一つ、たずねてもいいか」

「はい。何なりと」

男は底の知れない目で、ユディを見ていた。

そこに義父に似た気配を感じ、居心地の悪さを覚え、視線をそらせたくなる。

「もしかと思うが……私が、主賓か」

義父はユディが呼ばれたと言っていた。だがユディというよりも、自身の力を制御する術を持たぬゆえ、彼から離れられない双子こそが目当てだろうと。それはユディも同意見だった。

どちらかというユディはいつも添え物だ。

魔術というなら素材の一つ。

術者はあくまでも、朝陽と夜宵の二人なのだ。

しかし目の前の男は、はつきりとユディの名を呼んだ。その朝陽と夜宵に気づいていないはずがないのに。だからユディは、この問いかけに否定が欲しかった。

しかし、男は小さく頷いて。

「左様にございます。……ゆえに、準備に少々時間がかかります。

そちらのご令嬢は予想外でしたので、ユディフォードさまお一人用の客間しか、準備ができていないのです」

「仮にも公爵家所有の屋敷だ。客人は多いのではないか？」

「以前は……ですが、今はもう、誰も訪れようとはいたしません」
「だろうな、とユディは心の中で思う。

魔族にとって、アリエッタという存在はある意味で最大のタブーだ。一応トウルリアの系譜に名前は残っているが、その存在が語

られることは少ない。

アリエッタという歌姫は、その悲惨な生涯無しに語ることはできないだろう。

彼女には十三ほど年の離れた、幼い弟がいた。彼女は弟を可愛がり、その誕生日に詩を送ろうと半年もかけて考えた。そしてそのお披露目の日、悲劇は唐突にやってきた。

いくら年齢にわりに大人びていても、所詮彼女はまだ十四歳。

その年齢では、人間も魔族も精神年齢は同じだ。

十四歳の少女にとって、両親とは未だ何物にも変えがたい『愛を乞う相手』だった。自分をもっともつと見てほしいと、彼女は無意識で思った。あるいは自覚していたのかもしれない。

だが、両親は幼い息子ばかりを見た。

娘も愛していたが、どうしても後回しになってしまった。

そんな積み重ねが心の黒ずみになり、アリエッタの詩にしみこんでしまった。

詩は、感情次第で大きく変動する。同じ詩、同じ詠み手でも、その時の感情で得られる結果は異なってくる。それが言霊の難しいところであり、他にはない最大の特徴だった。

些細な悪意、些細な憎しみ。

それがもたらしたのは、死だった。

時を止めたように息をしなくなった息子に、両親は半狂乱になった。

疑いの目は、姉であるアリエッタに注がれる。

彼女は否定も肯定もせず、啞然とした様子で動かない弟を見ていたという。

アリエッタの両親は、すぐさま娘をこの屋敷に幽閉し、誰とも会えないように全ての連絡手段を断ち切った。そして数ヶ月もしないうちにここから離島へと移動し、そこで処刑した。

魔族としては異例の若さで、彼女は世を去ることになったのだ。罪人のように、処刑という形をとって。

「しかし……どうしてそのアリエッタ嬢の、娘とやらがここに残されている。そして、なぜ私を名指しで呼びつけた。朝陽と夜宵ならともかく、私個人はアリエッタとは縁がない」

「それはお嬢様に、直接お尋ねくださいませ」

「では今すぐ会おう」

「お嬢様は現在お休みなさっております。夕食の時に、お会いになると」

「……わかった」

部屋に行く、とユディは背を向ける。

彼が言う『お嬢様』とは。おそらく義父の言っていたアリエッタの娘だ。

いるはずがない、いや生まれているはずがないあの歌姫の娘。あれほどにアリエッタという名前そのものを恐れたトゥルーリアが、手にかけることもできず隠すしかない存在。

そんな相手に会うのだ。

「準備なしにつっこむのは……油を被って火に飛び込むようなものだな」

そのつぶやきに、不思議そうな顔をする朝陽と夜宵。

何でもない、と頭をなでて、ユディは普段あまり見せない笑みをこぼす。そして三人は階段のそばで待機していた侍女に案内されるままに、あてがわれた客間へと向かった。

それを、不安そうな表情で眺める気配に、気づくこともないまま。

『いもうと』

夕食の時間になった。

ユデイは朝陽と夜宵と共に、すでに食事を始めている。四人分の料理が並ぶテーブルは、しかし明らかに十人以上用のかかなり大きなものだった。義父の屋敷のよりも大きい。

義父は、表では華やかな装いをしているが、自宅ではそれほどではない。

食事は貴族にしては質素な方だと思う。肉類をあまり好まないの
で、野菜が多く並ぶのもそう見える一因だろう。ベジタリアンでは
ないのだが、どうにも苦手なのだと言っていた。

そこはユデイも同じなので、食事は魚介類と野菜が中心。さすが
にパーティでは肉を出しているようで、義父も多少は口になっている
ようだ。ユデイの場合は、それでも極力食べないが。

……なので。

「好き嫌いはいけませんの」

「大きくなれないですの」

と、双子に叱られるのは日常茶飯事だった。

朝陽と夜宵はとにかく何でも食べる。特に甘いものには目がない。
庶民向けの焼き菓子に特に好きらしい。あれは義父も、そしてユデ
イも好きだ。よっていつも争奪戦になる。

血の繋がりはないはずなのに、義父とユデイはよく似ていた。

侍女のナリア曰く、若い頃の義父にユデイはそっくりだそうだ。
面影がとくに、と彼女はよく懐かしそうに笑っている。ただ身体つ
き――主に身長は、ユデイの方が若干小柄らしいが。

「失礼いたします」

半分ほど食事を食べ終わった頃だった。先ほどから姿を消してい
た執事が、一人の少女を連れて部屋に入ってくる。執事に傳かれな
がら歩くその姿、その容姿に、ユデイは絶句した。

引きずるほどに長く伸ばされた黒色の髪。

透き通るような白い肌、それを彩る赤い膝丈のドレス。

薄く笑みを燈した薄紅の唇に、細められた星のような銀色の瞳。

彼女はユデイの向かい側の席に座り、さらに笑みの色合いを深くした。

「はじめまして……ユデイフォードさま」

そこにいたのは、あの肖像画の中から出てきたような容姿の少女だった。年齢は少し上なのか大人びているものの、髪型、目つき、肌などの色彩まで、全てが同じだった。

アリエッタ——そう言いかけたユデイは、その言葉を飲み込む。

彼女は死者だ。

いるはずがない存在。

ならば、目の前で傳かれているのは。

「わたくしが、あなたをおよびいたしました……この別邸の主、ニイナです」

「……あなたが、ですが」

「ふふ、驚かれたでしょう？ そう、わたくしが《娘》ですの」

彼女——ニイナは、ゆつたりとした動作で食事を開始した。

しばらく啞然としていたユデイだったが、すぐに食事を再開する。双子はというと、彼女の容姿にはさほど驚かず、ほとんど平らげていた。あの広間の肖像画で慣れたのかもしれない。

まあ、あれだけあれば、慣れざるを得ない。

しかも廊下や、この部屋にもアリエッタの肖像画は飾られている。ここの使用人たちは、さぞや大変な思いをしているだろう。なにせ屋敷のあちこちにかの歌姫の姿が飾られている上に、自分たちが仕えている主はその生き写しと言ってもいい少女。

執事も侍女も、極力ニイナに近寄らないようにしている。

——恐ろしいのだ。

あの歌姫の娘を自称する彼女が。

「それで、何用ですか？」

ユディはナイフとフォークを置き、声をかける。

彼女もまた、食事の手を止めた。

銀色の瞳がまっすぐにぶつかり合う。

「私をここに呼んだのは歌姫絡みでしょう？ 歌碑の封印ですか？」

「いいえ、そんなことはありません」

「……違う？」

彼女の答えにユディは、何とも言いがたい不信感を抱く。

ユディの主な仕事は、アリエッタが紡いだ詩片の『無効化』だ。

通常、術者がいなくなった術式は、適切に処理をしなければ大災害さえ招く。術式をもっとも的確に、そして安全に扱えるのはそれを作り出した術者のみだからだ。

アリエッタが紡いだ詩は石に刻まれ歌碑となり、あちこちに安置されている。その効力があまりに高いために、適度に封印をかけつつ利用しているが、時折それが不安定になる。

その処理係として呼び出されるのがユディ。

——正確には、朝陽と夜宵だ。

二人は常にユディのそばにいる。いや、ユディがいなければ何もできない、といっても過言ではない。少なくとも、今の双子には自らの力を引き出すことさえ、彼なしには不可能だ。

だから二人を呼ぶことは、主であるユディを呼ぶに等しい。

しかし今回は違う。

二人はむしろ添え物のようなものだ。

彼女の、ニイナの目当てはユディ。

その思惑が、彼には読めない。こんな場所に幽閉されているということは、トゥルリア家からは完全に疎まれていて、としていいはずだ。その自由も、極限まで制限されるはず。

ならばなぜ、本家を通じてユディを呼んだのだろう。

「あなたとやりたいことがあるからですわ、《お兄様》」

ニイナは晒う。

その笑みに、言いよつの無い違和感と不気味さを感じた。

「……妹を持った覚えはありませんが」

「もちろん、言葉のたとえですわ」

でも、とニイナは続ける。

「わたくしは容姿、あなたは力を《お母様》から受け継いできた。彼女らが『アリエツタの娘たち』と呼ばれるのなら、あなたもまたそう呼ばれるべき。そう……だから《兄妹》ですの」

彼女はうつとりと、恍惚とした表情を浮かべて言った。

——意味がわからない。

アリエツタとの縁も、儀式に彼女の遺物が使われていただけの話いきなり現れたかの歌姫の娘に兄と呼ばれる覚えなどないし、それほどに強い縁など身に覚えがない。

それともアリエツタの関係者ならみな兄であるのか。

だが、それなら双子はどうなる。朝陽と夜宵。力で言うならこの二人の方が上だ。ユディはただ彼女らを人形に見立て、制御しているだけのだから。

だが使用人と同様に、ニイナもまた朝陽と夜宵をいないものとして扱っている。

これは、どういうことなのか。

「そもそも」

ユディはあからさまに声のトーンを落とした。

相手を威嚇するように。

そして、自分を落ち着かせるように。

「私は貴女があのアリエツタ嬢の娘だという話すら信じていない。

彼女は死んだ。もしかすると子供はいたのかもしれないが、あの状況で、無事に産ませてもらったとは思えない」

「ええ、きつと反対されたでしょう」

「ならば」

「お母様は、わたくしを侍女の腹に移したのです。そして、逃した」
「まさか……」

ユディは絶句する。

腹の子を、他者に移し変えるという行為。

理論上は可能とされるが、それは明らかな外法であり寿命を削る禁術だ。

いくらあの歌姫でも、命の保障は無い。

「ええ、公爵家令嬢といえども、禁術に手を出せば命を落としかねない。ですがお母様はそれに全てを賭けられた。自分の死が免れないなら、せめて我が子だけでも……と」

「ありえない……そんな行為を、トゥルーリア家に見破られないはずがない」

そして何よりも、そうまでして隠された娘を、どうやってトゥルーリア家は見つけ出してきたというのだろうか。まだ『実はアリエツタは生きていました』と言われる方が納得できる。

隠され方も常軌を逸しているし、見つけたて隔離——幽閉しているのもおかしい。

本家令嬢であるあのアリエツタすら、処刑された。

正確には衰弱死だが、あれは処刑といって差し支えないだろう。

離島に繋がれたアリエツタは、まずその目を潰された。

——視線で魔力を操り、詩を紡がないよう。

次に喉を潰してその声を奪った。

——詩片を歌わないよう。

最後に四肢をもぎ取った。

——足や手で詩を紡がないよう。

それほどまで徹底的に彼女の全てを奪いつくし、死に追いやつて残忍すぎると方々から責めを受け、魔族や公爵家の面汚しとまで罵られ、魔王であるクレディリットから叱責されても、その正当性を訴え続けたあの公爵——アリエツタの実父が。

アリエッタの娘である彼女を、こうして生かすとは思えない。

今は息子であり、一件の後に生まれたアリエッタの弟に爵位を譲っているものの、その発言力はトゥルーリア家の誰よりも強いという。クレディリットに意見できる数少ない存在だ。

彼がいる以上、トゥルーリア家に歌姫の娘は生存できない。

拭えない違和感が、話の全てを彩っていた。

「意外と人は油断するものですわ。その女性は人間だったそうです。ゆえに油断し、気づかなかったのではないかしら、とわたくしは考えてます。でもそれは、どうでもよいことですわ」

「どうでもいい、だと……？」

「ええ、わたくしの《願い》には、関係がないので」

ニイナは立ち上がり、ユディに向かって歩き出す。

「わたくしはただ、《お母様を甦らせたい》だけですわ」

そのために。

「あなたが必要なんです《お兄様》……さあ、《わたくしの元へおいでなさい》」

その声色に身を硬くしたユディは、異変に気づく。

気づけば、執事を含め使用人が室内から消えていた。

ユディのそばにいたはずの、双子がいない。

いるのはユディ、そして——ニイナ。

「わたくしは血肉を、あなたは力を。そう、二つで一つですよ。

わたくしたちが結ばれることで、この世界にもう一度《お母様》を生み出すことができますの」

「……言霊か」

立ち上がり身構える。

失念していた。

相手はアリエッタの娘だが、それ以前にトゥルーリアの娘。

仮に彼女がアリエッタの実の娘であり、本人が言うように血肉——容姿しか受け継がなかったとしても、トゥルーリアという血統の力まで受け継がなかったということではない。

かの一族は言葉で魔術を統べる。

ただ——会話するだけで、相手を魔術に巻き込める。

トウルーリア本家の十八番、ある意味では彼らが公爵家たる証だろうか。しかし、他所よりそこに至りやすいというだけであり、何の鍛錬もなく生まれつきできるというわけではない。

まさか、こんな場所に閉じ込めた存在に——それだけの力があるなんて。

いつからだ。

いつから朝陽も夜宵もいなかった。

いつから二人だけだった。

考えても意味がない。

結界なのか、それとも幻術なのか。どちらにせよ破らなければ。

「手荒なことはしたくなかったが……やるしかないな」

ユデイは懷から、小さなビンを取り出し、投げた。中で赤い液体が揺れるそれは、ゆつくりと放物線を描き、二人の間に落ちる。光があふれたのは、中の液体が飛び散った直後だった。

——といっても、これもまた幻術の一つだ。ユデイには影響などない。

彼は屋敷の客間で用意しておいた、別のビンを次々と投げて。

「《こんな行為は無意味》でしかないのだから、《早く扉を開け》」

光などものともせず歩み続けるニイナに向かって、言葉を放った。相手はその筋のプロの家系ではあるが、ユデイには長年積み重ねたキヤリアがある。

先ほどのように不意打ちでなければ、いける。

ユデイの言葉で薬品に込められた魔術が発動し、ニイナの動きを縛り付ける。術者が意識を失うなどすれば、結界や幻術の類は、その効力を保てずに消える。

彼の狙いはそこだ。できる限り穏便に、ケガをさせずに終わらせなかった。彼の腰には愛用の剣があるが——それを抜くようなことはしたくない。

次々と発動する魔術をぶつけられ、解けるように歪む景色の向こう側で。

「ふふ……」

ニイナは、今までのそれとは比較にならぬ笑みを、その顔全体にくつきりと浮かべた。

ふわりと空気がうねる。ゆらいでいた景色が一瞬で元通りになる。ユディのすぐ目の前に彼女——ニイナがいた。

笑みを口元に、踊るような手つきで、ユディの頬を両手で包み込んで。

「いいえ、逃がしたりはしない。わたくしと《お兄様》は、交わらなければならないの。どろどろのぐちゃぐちゃになるぐらい混ざり合って、そして血肉と力を持つ《お母様》を産むの」

そしてユディの耳朵に、直接言葉が吹き込まれ。

「だから——《眠りなさい》《歌姫アリエッタの愛し子》」

視界が闇に落ちていった。

『いじょう』

ユデイが客間から出て行つて数刻。

残された朝陽と夜宵は、奇妙な違和感に囚われていた。

ぞわり、と空気がうごめく感覚。誰かが言葉を武器に変えているような、異変、異常としか言い表せず、そしてそうとしか思えない気配。しかし双子にとって最大の異変は別のことだ。

確かに現状も、充分におかしいと言わざるを得ない。

だが何より、こんな状況でありながら、ユデイが帰ってこないのだ。

そもそも、出て行つたときの様子もどこがおかしかった。今から思うと何でもおかしく思えるのかもしれないが。しかし特に何も言わずに、ユデイが二人から離れるなどありえない。

短時間ならよくあることだが、長時間となると……。

「なんか、おかしいですの」

「嫌な感じがしますの」

互いにそう言い合うが、ユデイ無しに動き回るのは、あまり好ましくない。だから二人は互いに現状の不安を口にしながらも、部屋のベッドの上から動くことはできずにいた。

二人は『アリエッタの娘たち』。

死したかの歌姫の詩片を、唯一制御できる存在。

制御のみならず——詩を殺すことさえも。

だが彼女らはあくまでも力を持っているだけにすぎない。自在に引き出す、という、魔術を扱うものなら誰もができる行為を、元はただの人間でしかなかった彼女らは未だできない。

だからこそ、彼女らの傍らにはユデイが存在する。

ユデイがいなければ、姉妹は自らの身を守る術がないのだ。

一応、魔術の鍛錬は始めているのだが……成果は芳しくはない。

ユデイのように元々の素質があつて、さらに幼い頃から叩き込まれ

ていたというわけではないせいだ。

だからこうして、離れ離れだと不安が募る。
何かあったらどうしよう。

そして、それ以上にユデイにもしものことがあったらどうしよう。
ユデイは以前、彼の義父であるクレディリットに言った。

もしも自分に何かあったら、二人を頼むと。

クレディリットの養子となり、あくまでも非公式ではあるが後継者に指名された。義父ほどではないとはいえ、ユデイはそれなりに命を狙われる可能性を背負っている。

そうやって、彼が真っ先に心配したのは、朝陽と夜宵のことだった。

自分無しには身を守ることでもない、幼い双子。自分がゆがめてしまった二人の未来を、少しでも鮮やかなものに塗り替えていこうと、ユデイはいつも気を配っている。

——今でも充分、幸せなのに。

しばらく無言が続く、先に動いたのは朝陽だった。

彼女は下ろしていた髪もそのままに、扉の前に移動し、そして振り返る。視線の先にいるのは自分そっくりの、けれどわずかに異なっている双子の片割れだ。

夜宵は小さくうなづき、ベッドから降りて待っている片割れの元に向かう。

「ユデイさまは、ほんとーにダメダメですよ。だからお嫁さんがいないですよ」

「女の子をこんなに待たせるなんて、ダメダメにもほどがあるですよ」

ねー、とにつこりと笑いあい、互いの手をしっかりと握り合う。
ゆっくりと扉を押し開く。

廊下は、ぞっとするほど静かだった。それなりの人数がいたように見えた使用人も、まるで最初から存在しなかったかのように見当たらない。嫌な感じがさらに募った。

二人は手をつなぎ寄り添いあいながら、廊下をあてもなく進んでいく。幸いにも入り口の方角はわかったのだが、他のことがわからない。このままふらふらと歩くか、あるいは……。

「あら……」

もつじき玄関というところで、二人は一人の少女と出会った。少女というよりも、女性なのかもしれない。外套のフードですっぽりと頭部を覆い、足先どころか指先も見えない。

それゆえに二人より年上の女、ということとはわかるのだが、年齢が不明だった。

外套のすそに刺繍された紋章は、この屋敷を所有するトゥルーリア家のもの。同じ紋章でも本家と分家で細かい装飾、糸の色が異なったりするが、彼女のそれは本家のものだった。

「ああ……わたしは、そうね、お客さんよ。あなたたちと同じ」

彼女はくすりと笑った。どこことなく、ユデイに似ている気がした。もしもユデイが女性だったなら、こんな感じだっただろうかとか、ふいに双子は思った。

優雅で気品にあふれ、意味もなくすがりたくなる優しさ。

それを全身にまとうような彼女は、少し身をかめて姉妹を見つめる。

「誰か、探しているのかしら？」

「えっと……ユデイさまを探してますの」

「黒い髪の男の人ですの」

「ユデイフォードだったら、いるところを知ってるわ。……こんなかわいい女の子を待たせるなんて、誰に似てしまったのかダメな子ね。せつかくだし、一緒に叱りにいきましょうか」

くすくす、と笑って、彼女はどこかに向かって歩き出す。

二人は『本当にダメダメですの』といいながら、彼女のあとをついていった。

『きょうき』

かち、かち、と時計の音がする。

誰かがそばにいるような、そんな気配もする。

身体は柔らかい場所で、仰向けだ。ベッドかなにかだろうか。

「《答えなさい》」

声がした。逆らえない。何か香りがする。気持ちがいい。声が頭の中に、ずるずると入り込んでいくような感じだ。それなりに不快ではあるが、なぜだかあまり気にならない。

ああ、でも時々ちくりと痛む。

「あなたの母の名は？」

マリー。

マリー・オーリエス。

何だか、何度も問われたような気がする。声にも隠しようのないほどの、苛立ちと焦りが含まれているようだった。もしかすると覚えていないだけで、何度も問われたのかもしれない。

「違うわ。あなたの母の名は、アリエッタ・ライム・エル・トゥルーリア」

この声は何を言っているんだ？

俺の母はマリーただ一人。アリエッタ……誰だ。そうだ歌姫だ。

彼女がどうして俺の母ということになっている。彼女の頭の中はおかしい。一度、医者に見てもらえばいい。

「いいえ《違う》のよ！ それは腹を貸した女で、母ではないの！」

……意味がわからない。

彼女は何を言っているんだ。

誰か、彼女を黙らせてくれないか。

耳障りだし、うつとうしい。

「あなたは、アリエッタの《息子》なの。わたくしの《兄》なの。マリーなんて女は、わたくしたちには関係ない存在。だから《忘れ

なさい》。全部《忘れてしまいなさい》」

聞き捨てならないな。

お前みたいな女に母を侮辱される覚えはない。

そう言つて、横つ面を張り倒したいのに、身体はまだ動かない。

声も出せない。せめて怒鳴ることだけでもできたなら。そう思うが、まるで身体の支配権を奪われたかのようなうだ。

「どうして…… どうして！」

声の主は、ダンダン、と床を踏み鳴らす。

まるで子供だ。

「こんなに深層心理が硬いなんて…… どうかして作り変えなければ。このままじゃ、《お母様》を生み出すことさえできない。もつと、もつと薬を強くしないと」

作り変える。

それはどういう意味だ。何を作り変える？

わからないけれど、嫌な感じしかない。身体は動かない。

「さあ…… 《お兄様》」

がさがたと音。そして香りがさらに強くなる。

甘えるような声だった。

「俺だなんて、乱暴な一人称はゆるしませんわよ《お兄様》？ あなたは誰よりも優れ、洗練された方なのですから。そしてわたくしと交わりますの。何日でも、何ヶ月でも」

身体の上に誰かがのしかかっている。ゆつくりと、確実に。

重い。でも軽い。

かすかに花に似た甘い香りがする。

のしかかられて、ゆつたりと寝そべられた。

「あなたの母は《アリエッタ・ライム・エル・トゥルーリア》」

飽きもせず、繰り返される暗示のような言葉の数々。

違う。母はそんな名前じゃない。

マリー・オーリエス。特別美しいというわけではなかった。でも子供ながらに、強く美しい人だと思った。魔術を教える時は厳しく、

けれどそれは全て愛ゆえの行為だと知っていた。
優しい人だった。

大好きだった。

彼女はマリーだ。アリエッタ・ライム・エル・トゥルーリアなんて、長々しくて豪華な名前じゃない。歌姫じゃない。違う、嘘を吹き込むな。俺の母はマリー、ただその一人。

「そう……あなたの母親は、マリーよ」

綺麗な声が聞こえる。

身体の上の重みが、消えていった。

浮き上がっていく感覚の中、誰かを見た気がする。

母じゃない。……義父でもない。女性だ。

彼女はただ優しく微笑んで、少しだけ泣いているようだ。

「あなたは『わたしの子』だけど、『それは忘れてもいいのよ』？」
「忘れないで、と言うかのように忘れろという彼女を、俺は確かに知っている。」

微笑む姿も声もはつきりと覚えている。

けれど名前だけが出てこない。俺とよく似た、いやそっくりな容姿なら、名前をすぐに思い出せそうなのに。どうして出てこないんだ。こんな容姿、知る限り二人しかないのに。

身体はさらに浮かび、彼女はみるみると遠ざかっていく。もう何も見えない。そこにたたずんでいることさえもわからなくなっていく。手を伸ばしたいのに、身体はまだ動かない。

——その時。

彼女が何かを口にした。

何かを言っているような気がした。

見えもしないし、読唇術も使えないのに、読み取ろうと目を細める。彼女ははつきりと俺を見ていた。まっすぐに俺を見ていた。だから俺に何か言っている。言っているはずだ。

あと少しなんだ。もう少しだけゆつくりさせてくれ。

何を言っているのか、何を伝えたがっているのか……あと少しでわかるのに。

視界が白い。もう上についてしまった。彼女は遠い。あの場所に
いるのかもわからなくなってしまった。底はどろりと暗い。もが
いても、もう沈むこともできない。

身体は自然と彼女に背を向けてしまう。
どうして。

「そう、《それでいいのよ》、ユディフォード……さあ、あなたは
《生きなさい》」

浮上しきる直前、最後にそんな声が聞こえた。

もう見えないはずの微笑が、なぜだかすぐそばに見えた気がした。
ああ……もう会えない。彼女にはもう会えない。きつと、この光

景も忘れてしまう。気づいてしまった彼女の名も、きつと忘れてし
まう。仕方がないことだった、相手はあの歌姫だ。

彼女の言霊に逆らうなんて、きつと義父でもできやしない。

忘れたのは何だったのか、それすらも忘れていく。忘れたことさ
え忘れ、忘れ、忘却に更なる忘却を塗りかされて、そして——どう
して、ここにいいのかさえもわからなくなった。

今はまだ、忘れた何かがあることだけは覚えている。

でも、それさえ消える。完全に上へ出てしまった瞬間に消えてし
まう。

忘れた何かの存在はその瞬間に、この世界から、永遠に。

赤子のように大声を上げて、彼女にすがって泣きたくなった。も
う誰かのかもわからない彼女にすがって、まだ幼かった頃のように
すがって、そして頭を撫でて欲しかった。

そんな縁など、ないはずなのに。

*** **

「このあばずれおんな！ ユデイさまになにしていますの！」

「離れるですのこのびつち！ しっしっ、ですの！」

どたんばたんと、誰かが暴れる音がする。

何か——されていたような気はするが、ユデイの意識は記憶していない。ただ、どうしようもない嫌悪と、感情が締め付けられるようにかき鳴らされたこと。それだけしかない。

だがどちらも思い出そうとするほどに、ぐいぐいと遠ざかっていった。

残されたのは、罵倒の声が聞こえる室内。

聞きなれた、かわいらしい双子の——少々アレな言葉の数々だった。

二人はユデイを見つけたのだろう。

見えなくともわかるほど、ハデに息を呑んだ。

「し、縛られてますの！ この女、倒錯趣味がありますの！」

「緊縛ふれい最悪ですの！ ヘンタイはあっちいけーですの！」

ずいぶんと、乱暴でアレな言葉ばかりが飛び出している。女の子がそんな言葉は、とユデイは心の中で苦笑した。誰に教わったのやら。きつと義父だろう、そうに違いない。

うつすら開いた瞳は、歪んでいた。

泣いて、いたようだった。

「ど、どうしてここが……」

「お姉さんに案内してもらったですの。いつの間にかいなくなっただですの」

「三人でユデイさまを叱るですの。でもお姉さんいないから、二人でやりますの」

「お姉さん……？ だ、誰ですかそれは！ 屋敷の使用人はみんな外に出したのに！」

「そんなことはどーでもいいですの」

「そうですの。どうでもいいことですの」

二人が駆けてくる音。途中で二手に分かれた。一人がきつと、彼

女——ニイナをひきつけているのだろ。ユディやナリアとの追いかけてここでよくやる作戦だ。

音だけで光景が思い浮かぶ程度には、混濁していた意識もはっきりしてきた。

腕を動かす。姉妹が言ったように、腕は縛られているようだ。おそらくは、ベッドの足にでもくくりつけてあるのだろ。多少引つ張った程度では、どうにもならない感じた。

しかも特別な加工が施された拘束具なのか、魔術を紡ごうとしてもできない。用意周到というべきか、その徹底された準備にぞっとすればいいのか。

歪んだ視界の向こう側に、黒い影。……夜宵だ。

「ユディさま、だいじょうぶですよ？」

夜宵はすばやくユディの身体を戒めるものを、どこから持ってきたのか小さなナイフで切り裂いていく。どうにか片腕が自由になり、ユディは手の甲で乱暴に目元を拭った。

はつきりした視界の中、朝陽がニイナと向かい合う姿があった。

ニイナは髪を降り見出し気味に、何とかユディの元に向かおうとする。だが、すばしっこい朝陽に翻弄され、ただただ、苦しそうに息を荒げて疲労をためていくばかりのようだ。

彼女は起き上がったユディを見て。

「う、動かないでええええ！」

ただ、そう絶叫した。

かすれた声では言葉は力を持たない。感情こそもっているだろうが。

ようやく動けるようになって、ユディはゆっくりと立ち上がった。

「二人とも、無事でよかった……だが、どうやってここに？」

「綺麗な女の人に案内してもらったのですの」

「いなくなっちゃったけど、綺麗な人でしたの」

「ユディさまが女の人だったら、きつとあんな感じですよ」

「きつと今よりもってもてだったですよ」

「……それは、褒められていると思つて、いいんだよな？」

傍らに駆け寄つてきた二人と、言葉を交わす。そう長く離れていたわけではないが、ずいぶん長時間——数日にさえ感じられる。

二人がケガもなく無事で、ユディは心から安堵する。

二人が言う謎の女性が気になるが、今はそれどころではない。

それに変わり、ふつふつと湧き上がるのは、元凶であるニイナへの怒りだ。

「なんで、何ですか……ねえ《お兄様》。ニイナのどこがいけませんか？ あなたのためならどんなことでも耐えますのに。どんな仕打ちも、耐えてみせますのに。ねえ、どうして」

いやいや、と子供のように喚く彼女は、明らかに正気ではない。最初こそ取り繕っていたようだが、予定が盛大に狂ったことで、混乱の中、その本性がさらけ出されている。

「いやあ、いやあ《お兄様》あ！ どうしてですかどうしてですか！ あなたが望むままにわたくしは淫らに振舞つてみせますわ何人でも《お母様》を産みますわだからだからだから！」

双子を自分の背後に隠し、ユディは暴れ始めたニイナを見る。

最初は歌碑に関すると思ひ、そしてワケがわからなかった『自分が呼ばれた理由』。

それは、『コレ』なのかもしれない。

アリエッタの娘を自称し、気の触れたとしか言い様のない令嬢。

もしかすると——トウルーリアの目当ては、彼女をどうにかすることだったのか。アリエッタの娘を自称するこの少女は、感情で威力が変わる言霊を使うのに、完全に狂っている。

ならば、同じような存在に何とかしてもらおう。

部外者ならば、重要な魔術師を失うこともない……と。

実に吐き気のする、醜悪なやり方だ。

トウルーリア家らしい。

「《お兄様》！ 《お兄様》あ！」

喚き散らす気の触れた少女に、ユディは刺し殺すような視線を向

ける。振り乱されるその黒髪も、無駄に派手な色合いの衣服も、全てが目障りだ。齒軋りさえしてしまうほど不快だ。

それらの全てが、彼女に、まるで『似合っていない』。

「――《消えろ》」

するりと出てきたのは、自分でも驚くほど、冷たい声だった。

こんな声を、自分は発することができののかと思うほど。

「え、あ……あああ」

数歩後退し、ニイナはうずくまった。自分を抱きしめて震えている。その動きにあわせ、まるで砂が零れ落ちるように――彼女から何か剥がれ落ちた。

それは黒であり、銀色であり、そのほかのいろんなものが混ざっていた。

彼女が自らに施した施術を、あの一言が砕き散らせたのだ。

「……すべては虚像、か」

しばらくして、ユディの前には一人の少女がいた。

くすんだ色合いのこげ茶の髪は、かなりキツめの癖がついている。ゆつくりと見上げた瞳は他愛のないブルー。トゥルーリアの血が強ければ誰もがそうなる、極めて典型的な容姿。

どうしてあんな姿かたちをしていたのか、興味もないしどうでもいい。だが、理由は何となく推察できた。結局、かの公爵家は誰よりも歌姫に縛られている、という他愛のない話だ。

歌姫を忌避し、しかし第二の《最高傑作》を求め、いずれ歌姫へと至る。

そんな、くだらない堂々巡り。

第二の《最高傑作》を求めるが故の厳しい教育の過程でニイナは壊れ、自らを歌姫の娘と思い込むに至ったのだろう。そしてどうにもできなくなり、ここに幽閉することになった……。

屋敷中の肖像画も、本人からすると『鏡』のつもりだったのかもしれない。

自分の容姿はまさしく、アリエッタと同じだと思い込むための。

「ユディさま、これ……」

「だれ……ですの？」

双子は目をぱちぱちさせ、驚いた様子だった。

いきなり、目の前の少女の容姿が変貌すれば——当然の反応か。

ユディは呆然とした彼女の前に歩み出る。

「ニイナ、あなたは《アリエッタの娘でもなんでもない》、《ただの気が触れただけの小娘でしかない》。《今後、我々に関わってき
たなら、その時は命はないと思え》」

「あう……おにい」

「《黙れ》」

徹底的に言霊を連ね、相手の行動を縛り上げた。抗えない言葉に心底怯えてがたがたと震えるその姿は、先ほどの自信に満ち溢れた少女と同一とは思えない。

全て虚像だったのだ。彼女の自信は、アリエッタの娘だと思い込んだ結果、作られていた幻のようなもの。それを懂れというべきなのか、ユディはわからないし興味もない。

唯一つ、次に会えば容赦なく、自分は彼女を殺すだろう。

彼女に何をされていたのかは思い出せない。

ただ、不快感と嫌悪が残る。

「これは……」

そこに駆けつけた執事は、惨状に言葉を失った。

「トゥルーリア卿にしっかりと伝えておけ。——次は無い、と」

動けない男にそうはき捨てて、ユディは双子を連れて部屋を出て行く。

ふと、視線を向けた先にやけにへたくそな、アリエッタの肖像画が飾られていた。黒の外套を羽織った姿をしている。着飾った他と比べて、かなり地味なものだった。

そこには、書き手のサインに変わって、二つの詩が綴られている。

我が最愛の花嫁へ。

僕は君だけを愛している。

一つ目は見覚えのある筆跡だった。
おそらく、これを描いたのは彼なのだろう。

最愛の子。

あなたはどうか、幸せに。

二つ目の詩。

美しい字体で綴られたそれに、暖かくて強い言霊を感じる。
思わず伸ばされたユディの指先が触れる前に、肖像画は砂のよう
に崩れて、消えた。

『おもかげ』

「アリエツタには子供がいたのは、間違いないよ。魔族だからね、何となくそういうのはわかるんだよね。というか反対されていたからさ、子がいれば結婚できるかなって思ってたさ」

屋敷に戻った息子に、クレディリットはそう言った。

旅に出る前に詳細を語らなかったのは、もしかなくともわざとだったのか。

怒りのあまり、口元に浮かぶ笑みが歪むのを、自分でも感じていた。

「そう怒らないでくれないか。真剣だったんだから、あの頃は」
「どうだか」

「……お前からすると、確かに私は彼女を見殺しにしたも同然だろうね。彼女がされた全てを知ったのは、全て終わってからという言い訳も、確かに白々しくむなしばかりだ」

クレディリットは、肩をかすかに揺らしている。

いつになくその表情は、自虐の色を深めているように、ユディには見えた。

当時からすでに魔王と呼ばれる身の上で、好きな娘子一人守れなかったという過去は、他者が創造するよりも深く彼の心を傷つけ、今も血を流させているのかもしれない。

「それで、彼女の子が魔術——いや禁術で生き延びたと知ったのは？」

「直感だよ。身の回りの何もかも置いて別邸に行った彼女が、唯一持っていたのは長年彼女に仕えていた侍女だった。そして、あの別邸についてすぐに暇をもらい失踪……だからね」

「確かに……何かしら勘ぐりたくはなりますが」

「気がついた時、これは恋文だと思ったよ。彼女から私への、最初で最後の。何通も送った私からの恋文に、彼女が返してくれたたつ

た一通の。だから探したさ、世界中をさ」

「……それで私に出会った、と」

「あれもまた、彼女の導きだったのかもしれないね」

だとしたらユデイは、彼女に感謝すべきなのだろうか。あの日、クレデイリットと出逢ったことで、ユデイの運命はがらりと色彩を変えた。その原因が、あの歌姫ならば。

「しかし、侍女の失踪がどうして子の生存に繋がったのですか」

普通は別のことを考える。

だが、彼は身に覚えがあるとはいえずさま子を関連付けた。証拠も何もない。世界中を探し回るにはあまりにも弱い、むしろ存在しないに等しい可能性を、どうして彼は信じたのか。

「そう信じたかったんだろうね、きっと。あの頃の私はまだまだ子供だったから。彼女と結ばれ彼女との間に子を得て、家族で幸せになる未来を奪われたと、信じたくなかったんだろう」

魔王になった一人の少年が、最愛の歌姫と描いた夢。

二人で幸せになること。

そして、たくさんの家族に囲まれること。

けれどその夢は砕かれた。彼女はアリエッタの娘でもなんでもなく、ただ歌姫に踊らされただけの少女だった。あの容姿も魔術で作り出されたまやかしで、全てがでたらめの虚像。

結局、歌姫アリエッタは、子を生む前に死んだのだ。

声を奪われ、四肢を奪われ、世界を奪われ。

医療体制などとも存在しない離島に幽閉されて。

そんな有様で、どうやって子を産むというのだろう。

まさか本当に侍女の一人に、腹の子を移したとも言っただろうか。義父の証拠もない直感であり、哀れな一人の少女が思い描いた、くだらない妄言ではないと言うのか。

確かに、もしそうだったならば、あまりにも早い死に理由はつく。そういう危険な魔術は、その成否に限らず、術者の命を確実に貪りつくす。

飯にそれを行つたとしても、生まれる子の種族は人間だ。身体が作られる前に、人間だった侍女に移したのだから。そうすると、とつくの昔に彼女の子は死んでいることになる。

つまりは、どちらにせよ意味はなかったのだ。

歌姫は死に、生かされたかもしれないその子もすでに死に。

残されたのは、孤独を楽しむ一人の男。

「まあ、彼女がそうであるとは微塵も思っていなかったよ。トゥルーリア家には一度騙されているからね。私だけじゃない、アリエツタの一件で、かの一族はずいぶん信用をなくした」

クレディリットは、楽しみに笑って言う。

「真実などどうでもいいのさ。彼女と私は愛し合っていて、心は今も共にある。私の花嫁は彼女だけで、私には子がいて、その子の母は彼女に他ならない。ほかには何も、望んでいない」

彼はユディを、ただ静かに見つめていた。

まるでその容姿の向こう側に――亡き最愛の歌姫の面影を見るかのように。

『こいぶみ』

すべて終わった。

わたしがやるべき抵抗は、全て。

わたしはそつと、空っぽになってしまった自分のおなかを撫でさせる。

ほんの数刻前まで、確かに自分に宿っていた命。

触れ合うことも、小さいその手を握ることもできない。

産みの痛みを、知ることさえ……もう。

でも、それでいいのよ。

生きてくれば、それだけでいいのよ。

お父様はわたしを殺すでしょう。幽閉なんて真つ赤な嘘。だからあの子も殺される。みんなみんなだまされている。だからわたしは、あの子だけでも生かすことに決めたの。

ああ、愛しい息子。名前は、もう決めてあるの。

彼と交わした最初で最後の逢瀬、その時の睦言で決めているのよ。彼女に託したの。あなたという命と、あなたの名前。

そう、だからきつと彼は気づいてくれる。あの子に気づくわ。わたしの子だと、そして自分の子であることに。ねえ、あなたが巡り合ったあの子は、立派な姿に成長できているかしら。

いえ、わたしとあなたの息子ですもの。心配なんていらないわね。本当は、この腕でしつかり抱きしめて育てたい、愛したい。

ごめんなさい。こんなことしかできない母親で……。

どうか幸せになってください。

そしてわたしは——最後の詩片を心に記す。

ほんの少し、もっと早くお返事を書けばよかったなんて、後悔して。

たとえわたしの詩が、世界を呪う日がこようとも。

わたしは、あなただけを愛しています。

わたしはあなただけの歌姫。

あなただけの花嫁。

死しても、わたしはあなたのために。

『無題』

——アリエッタ・ライム・エル・ジェストフェリ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535x/>

最期の恋文

2011年10月20日03時02分発行